Nagasaki University

長崎大学総合環境研究　第7巻　第2号　pp. 49 − 52　2005年7月

草の根通信
― 環境市民の活動とその記録 ―

中村　　修（長崎大学大学院生産科学研究科）
Osamu NAKAMURA
Nagasaki Univ. Graduate School of Science and Technology

新木　安利（草の根の会）
Yasutoshi ARAKI
Kusanonenokai

梶原得三郎（草の根の会）
Tokusaburou KAZIWARA
Kusanonenokai

A bulletin issued by a citizens' movement for antipollution campaigns

Abstract

Kusanone Tsuushin is a bulletin, issued by a citizens' movement, which was published every month for 32 years until Vol. 380. Ryuuichi Matsushita (1937-2004), a writer, edited most of the issues and Kusanonenokai members were responsible for distributing them. Kusanone Tsuushin consisted of articles written by people engaged in antipollution campaigns and citizens' movements, in addition to Matsushita's essays. This paper introduces a brief history of Kusanone Tsuushin. This paper also shows that an index of Kusanone Tsuushin can be searched on its webpage (http://www.junkan.org/).

Key words: Kusanone Tsushin, Ryuuichi Matsushita

はじめに

松下竜一（1937年－2004年）が彼の著書「暗闇の思想を」（朝日新聞社）のなかで、　夜には電灯を消してみよう、利便と消費一辺倒のくらしをちょっとだけ見直してみよう、と論じたのは30年前の1974年のことであった。

2003年には環境省の呼びかけで、地球温暖化対策という位置づけで「キャンドルナイト」が実施され、「電気を消して、ロウソクの明かりを灯そう」と市民に呼びかけている。

「デンキを消して、静かな夜を。そして想うことは、愛する人のこと、平和な世界のこと、未来のこと、地球のこと・・・。いつもの生活とちょっと違うことをしてみると、優しい、豊かな気持ちの自分自身と出会えます。灯りを落とした部屋で、スローな時間を、家族や友達、恋人と語って過ごす夜。それが明日の地球を救う過ごし方でもあるのです。」（http://www.wanokurashi.ne.jp/act/campaign/index.html）

松下が提唱した「暗闇の思想」が、「キャンドル

受領年月日　2004（平成16年）12月20日
受理年月日　2005（平成17年）4月22日

NII-Electronic Library Service

Nagasaki University

ナイト」という形で全国に広がりを示すまで、実に30年かかっている。

松下は1973年に、自宅の大分県中津市に近い福岡県豊前市の火力発電所建設への反対運動に参加。豊前火力訴訟で「環境権」を主張し、「暗闇の思想を」を執筆した。1985年に最高裁で敗訴が確定したが、その後も機関紙「草の根通信」の発行を続け、通信は全国の市民運動、特に環境問題を中心とした市民運動の交流の場となってきた。

名もなき市民の地道な活動が、やがて国の環境政策となっていったことは、冒頭の「キャンドルナイト」をあげるまでもない。

そうした市民の活動を記録し、情報交換の場として存在してきたのが「草の根通信」である。

本稿では、松下が中心になって編集、発行してきた「草の根通信」を簡単に紹介し、32年間、380号まで続いた通信の全索引をＨＰからダウンロードして、多くの人が活用できるようにすることが目的である。

1　草の根通信の歴史

草の根通信は32年間、毎月発行され380号続いた。その大半は松下竜一が編集、草の根の会が発送作業などに取り組むことで発行を継続してきた。

しかし、厳密には草の根通信は以下の４期にわけることができる。

1・公害を考える千人実行委員会発行
　72年９月１号　　～72年11月３号
2・環境権訴訟をすすめる会
　73年４月４号　　～82年１月110号
3・草の根の会
　82年２月111号　～03年６月367号
4・草の根の会
　03年６月特別号　～04年７月380号

●公害を考える千人実行委員会発行

72年９月１号～72年11月３号

草の根通信は、福岡県豊前市の「公害を考える千人実行委員会」の機関紙としてスタートし、「豊前火力に反対し、今こそ一大市民運動を」（巻頭の文章のタイトル）というテーマを掲げていた。

発行責任者は恒遠俊輔、伊藤龍文、釜井健介である。「草の根」の名前にこめた志について、恒遠は、幕末の吉田松陰の思想を紹介しながら、「野にあって志を同じくする者の決起によって社会の変革をめざすという、わが国における草の根民主主義の萌芽そこにみるようだった」と書いている。（草の根通信　2003年９月370号）

●環境権訴訟をすすめる会

73年４月４号～82年１月110号

1973年２月、中津公害学習教室と豊前の公害を考える千人実行委員会が合同で学習会を行い、３月、「豊前火力絶対阻止・環境権訴訟をすすめる会」を結成し、「草の根通信」の機関誌名を引き継いだ。豊前の編集事務局は釜井、中津は松下竜一。

全国の公害現地を訪ね、講演会やシンポジウムを開き、環境権裁判の模様を誌上に再現するなどユニークなミニコミ誌となった。発行部数は最初の500部から2000部にのびた。

ごく早い時点で松下が編集の中心になっていく。

あけっぴろげの編集方針について松下は、「私小説に毒され、おのがことをあからさまに書いてこそ文学と心得ている三文文士松下センセは、隠さなければならぬこと思いつきもしなかったのである。（略）人と人とがつながっていくきずなは、勿論、その考えであり理屈の共通性であろうが、それが本当のぬくもりで結ばれるには、丸ごとの人間を知ってのことでしかたがないだろう」（「80年代No12」1981年11月）と書いている。

●草の根の会

82年２月111号～03年６月367号

環境権裁判は最高裁で審理中であったが、「もはや対豊前火力闘争が実質的に終わった」として、1982年１月、すすめる会は解散を宣言し、２月111号から草の根通信はそのサブタイトルを「豊前火力絶対阻止」から「環境権確立に向けて」にかえる。

「むしろ新しい出発のために」と、松下は書いている。

以後テーマが拡大し、全国で反戦、反核、反原発、反開発、環境問題、教育、人権、死刑廃止などの市民運動の報告、マスコミがあまり取り上げないテーマや、松下の連載ずいひつ、ろくおんばんなど、人間味の濃い松下の編集方針は変わることはない。

「ろくおんばん」を読むために後ろからめくる読者も多い。

病気がちの松下は入院したときもベッドの上で編集作業をこなし、30年以上一度の発行遅延もなく毎月発行を続けた。草の根通信は松下のもう一つの作品である、と梶原が言うゆえんである。

NII-Electronic Library Service

Nagasaki University

●草の根の会

03年6月特別号～04年7月380号

2003年6月8日、松下が福岡市で講演のあとに倒れた。6月特別号から梶原得三郎、渡辺ひろ子、新木安利の共同編集で発行された。2004年6月17日松下が死去、通信も2004年7月380号で終刊となった。

2　表現の場としての草の根通信

通信の読者は中津市や九州にとどまらず、全国に広がっていた。全国各地で市民運動を闘っている人、その支援者などが中心である。また、松下竜一の生き方に共感する人、ファンなどである。毎月の発行部数は、1500～2000部である。

通信は、いくつかの連載、投稿、松下のエッセイ、読者からのメッセージ（ろくおんばん）で構成される。

投稿といっても、読むに値する一定のレベルの読者からの記事がいつも届くわけではない。そこで、編集者としての松下は各地で活動する市民に連絡し、記事の執筆を要請する場合も多くあった。集まった原稿には松下が目を通し、文意を尊重しつつも、読みやすくするために多少手を加える場合もあった。

そうして編集された通信は印刷され、毎月、草の根会のメンバーが集まって発送作業を担った。

驚くべきことは、通信が読者による通信費、カンパだけで30年以上も発行され続けた、ということである。

松下や草の根の会の無償の働きがあったとしても、発行部数が2000部では、その印刷費、郵送費は大きな金額になる。

年末の12月号の通信で、松下が翌年の通信費、カンパを呼びかけるだけで翌年の印刷費・郵送費が一気に集まるほど、読者の通信への思いは大きかった。

それは、それだけ質の高い文章、地域からの生の情報が通信に掲載されていた、ということでもある。

また、作家松下竜一のエッセイ、記事が毎月掲載されていた、ということも読者を引きつける大きな要因であった。通信に連載された記事をベースに、松下の著書が何冊も発行されている。

・松下竜一編「環境権ってなんだ」
　ダイヤモンド社　1975
・松下竜一著「いのちきしてます」
　三一書房　1981
・同　「小さな手の哀しみ」　径書房　1984
・同　「しかけてびっくり反核パビリオン繁盛期」
　朝日新聞社　1986
・同　「右眼にほろり」径書房　1988
・同　「母よ、生きるべし」講談社　1990
・同　「底ぬけビンボー暮らし」
　筑摩書房　1996
・同　「本日もビンボーなり」
　筑摩書房　1998
・同　「ビンボーひまあり」　筑摩書房　2000
・同　「そっと生きていたい」
　筑摩書房　2002

松下の記事だけでなく、各地で活動する市民のレベルの高い記事もまた、通信での連載などをきっかけに出版されている。

・梶原得三郎「さかな屋の四季」
　草の根の会　1982
・松下康子「耶馬の里ばなし」
　草の根の会　1986
・土井淑平「反核・反原発・エコロジー」
　批評社　1986
・土井淑平「人形峠ウラン鉱害裁判」
　批評社　2001
・柳　哲雄「風景の構造」
　創風社　1990
・伊藤ルイ「虹を翔ける」
　八月書館　1991
・伊藤ルイ「海を翔ける」
　八月書館　1998
・坂本信一「ゴミにまみれて」
　径書房　1995
・山口平明「娘天音　妻ヒロミ」
　ジャパンマシニスト　1997
・西村有史「エイズ患者診ます」
　青木書店　1998
・横川輝雄「ボダ山の見える教育」
　碧天舎　2003

地域で活動する者にとって、表現の場はそう多くはない。仮にあっても内輪だけの小さなミニコミがせいぜいである。草の根通信は、そういった市民を表現者として育成する場でもあった。

通信に投稿し、掲載された原稿は、確かに自分のものではあるが、明らかに読みやすくなり、表現し

NII-Electronic Library Service

Nagasaki University

ようとしていた真意により近いものとなっていた、という経験をした投稿者も多いはずである。

例えば、80年代に中村が投稿した記事の多くは、松下の手が加えられ読みやすくなっていた。作家、松下竜一の文章のセンスと、社会的なセンスによって磨きがかけられただけで、意図しようとしたものが鮮明になるという経験を積んだ投稿者も多いはずである。

その結果、いくつもの出版社から出版されるほどの作品が通信から生みだされてきたのである。

各地での地道な活動。そして、それをきちんと表現する文章力を草の根通信という場で育成されることで、再び、地域の活動が確かなものになっていく。

草の根通信は、そういう役割も持っていた。

380号に掲載した終刊の辞を、渡辺ひろこは「『草の根通信』は終わるけれど、彼が育て続けた『草』は全国に種を飛ばし、根を張っている事でしょう。ひとりひとりがそれぞれの『場』でセンセがくれたものを育てていきましょう。『闘う』ことの意味を自分のものとして生きて行きましょう。」と結んでいる。

松下亡きあと、草の根の会の代表は、親友だった梶原得三郎が引き継いでいる。

参考文献

・丸山尚「ミニコミ戦後史」三一書房　1985年

・松下竜一を勝手に応援するページ
http://www.cis.yamaguchi-pu.ac.jp/~kiyohara/personalweb/matsushita/ryuichimenu.html

・
http://sun-set.cocolog-nifty.com/blog/2004/06/post_3.html

＜資料の利用方法について＞

草の根通信の全索引が新木、梶原によって作成された。残念ながら、この資料はあまりにも膨大なため、本紀要上で掲載することは不可能であった。そこで、このデータをＮＰＯ法人　地域循環研究所のＨＰ（http://www.junkan.org/）上に掲載する。

なお、草の根の会の同意を得ることを前提に、ダウンロードしたデータは、各自の責任で活用していただきたい。また、本稿をきっかけに松下の講演ビデオ、テープなどを募っているので、協力を呼びかけたい。

NII-Electronic Library Service